

# 公開説明会 12/8(月) 4:00PM 大学でのRI利用問題

原子核工学科放射能実験の本質 場所 教養A121

## 主催・京大原子核学会 (内線 (7948))

全学の学生教職員のみなさん！ 今度、工学部当局が突然発表した原子核工学科の放射能汚染は、一定の決着がついたかのようにいわれています。私たちは、大學研究におけるRI（放射性同位元素）の使用の是非について追及してきました。ところが工学部当局、原子核工学科は、2度にわたる公開説明会と検査による安全確認であたかも学生の了解も得られ「汚染」について問題はないかのように判断し実験再開をおこないました。

また、学生、研究者一部には、今回の汚染を（RIを利用した研究の内容が向むけられたのにしかからず）実験者、研究者の身体上の安全問題にすぎず、実験者の身体の安全が確認されたので、RIは積極的に使用すべきだとばかりに、実験再開を支持し、決着をつけた人たちもいます。

果してこのようなまやかしの「決着」で問題は解決されたのでしょうか。私たちは、否だと思います。何故なら、私たちが大學において追及してきたことは、原子核工学科研究が現在の原子力開発管理体制の一翼を担っていることです。今秋、放射性廃棄物の海洋投棄に反対する太平洋諸島民衆に応え、日本においても海洋投棄反対運動がもりあがりました。原子核工学科のみならず、RIを使用している研究者は、実験後は、廃棄物の生産者としてあるということを忘れてはいけません。RIの生産から廃棄までの一部分＝実験、研究の使用だけを管理強化して、安全だとは言いかねないのです。そこで、同時に、そのようなRIを使用した研究の内容について、批判してきました。今回、原子核工学科では、RI使用のチェック、実験計画書提出etc、管理強化を新たにおこなおうとしています。専門管理体制でなければ、いつけるのではなく、研究者一人がほんとうにRIを使用しなければいけないのかどうか真剣に考える時期にいるのだと思います。原子核工学科の教室（教室主任、RT主任）の参加を得て、討論会を行ないます。この場で、研究におけるRI使用の必要性やその管理体制、研究者の零細、原子核工学科とは何なのかといったことについて討論したいと思いますので、全ての皆さんのお集まりを祈ります。